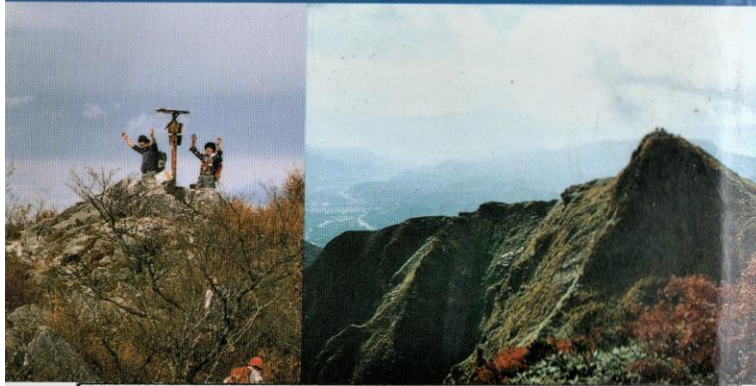


利根川流域五十山

我孫子登山俱樂部



叢書房利根川叢書3

利根川流域五十山

我孫子登山俱樂部

叢書房



④3 女峰山

標高二、四八三メートル

山岳信仰の山であり、アルペンの山でもあり

女峰山、女性的でロマンチックな山名であるが、日光連山中で最もアルペンの霧閉気を持つ山として知られている。中禅寺湖の北側にそびえる男体山と共に古くから修行僧の信仰の山であった。

今回のメンバーは五名。十一月三日の早朝、東武電車にて日光へ向った。晩秋の空は晴天に恵まれ、久方ぶりに快適な山行が期待できそうである。

日光の駅前のそば屋で朝食をとり、輪王寺の境内を抜け、東照宮横の道を登山口へと向う。国際的な観光地として栄える日光も、シーズンオフで早朝なためか観光客の姿も少なく、実にのんびりとしている。時々見える赤稚山の勇姿を写真に撮ったり、苔むした石垣をながめながら進む。トップのN氏、朝食の「山菜そば」で元気が出たのかピッチが早い。所用で遅れたH氏を待ち、急いで追いかけてが離れてしまって、大声で呼ぶも応答がない。

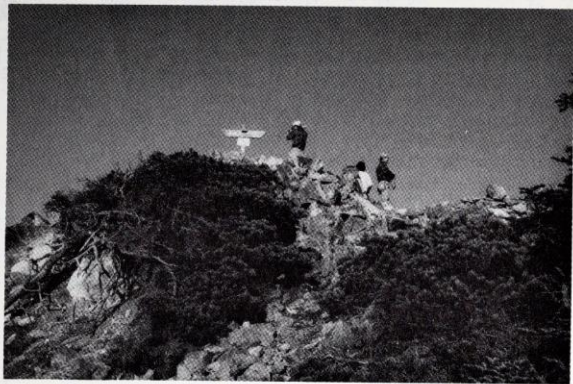
気がついてみると、女峰山登山口の行者堂を通り過ぎて雲竜渓谷方向に進み過ぎたようだ。先行パーティが行者堂横より正規ルートを行ったのか、間違っ行って行き過ぎたか、あるいはトップのN氏が

別な道を知っているかの行動なのか不明であるが、我々は行者堂まで引き返して正規ルートに行くことにした。陽は未だ高く、N氏の他のベテラン三名パーティ故に心配はいるまい。頂上の宿泊予定地・唐沢小屋にての再会を信じた。

行者堂横の登山口分岐まで戻り、やっと登山道へ取りつく。杉木立の道をしばらく行くと殺生石碑がある。石碑を過ぎると道は単調な登りで、カラ松林や、くま笹の林が延々と続く。稚児の墓の石仏は、この単調なルートの右側にひっそりとたたずんでいた。歴史を感じさせる殺生石、一生を鍛練にささげた古えの修行僧とその子の悲話を今に伝える稚児の墓等々、一時の空想が疲れを癒してくれる場所でもある。

八風を過ぎると道はカラ松やダケカンバの単調さから離れて、ケルンの目立つガレ場となり、やっと視界も開けてくる。右側には赤稚山側面の荒々しい赤茶けた断層が現われる。緑の山に赤茶けた断層は

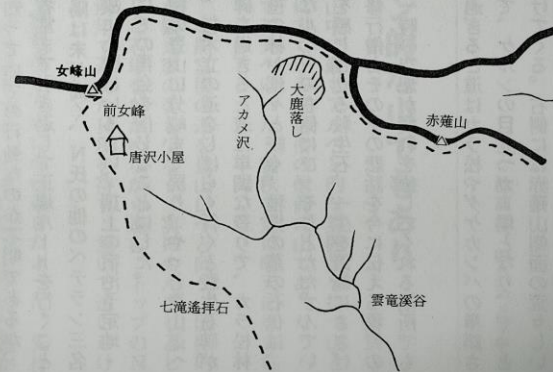
④3 女峰山



女峰山山頂

非常に対象的で、大きな雑刀でスパッと切り落としたような感じである。

黒岩・七滝遙拝石付近から、短い秋の太陽も沈み、夕闇が近づいてきた。途中のコースミスによるロスが大きく、これより唐沢小屋まで一時間四十分はある。H氏と二人、黒岩で小休止、ランパを取り出して出発。少しピッチを早めて急登コースをあえぎながら急ぐも、体は言う事をきかずにバテ気味。Nパーティが先行しているのか後続か、迷っていた気持ちもここに来て、彼らが絶対には先行していると確信。H氏に先に小屋に急いでもらい、当方のみマイペースで頑張る。前女峰の左巻きの樹林帯では完全に日も没してしまった。樹林帯内で背より高い木におおわれた道は灯をつけても不鮮明で、何度かコースミスをした後、唐沢小屋に到着した。しかし先行のNパーティは未だ到着しておらず、小屋内は二、三パーティ、十名位が就寝中でひっそりとしている。小屋は新しく、近代的で頑丈な建物であるが、じっとしていると、ヒシヒシと寒気が身にしみてくる。Nパー



⑬ 女峰山

ティを心配しながらも、空腹を満たすべくH氏と二人でザックを開放して手持の食料を出し合っていた。しかし食料はNパーティが持参しており、出し合った食料はポケットウイスキー一本と、ピーナツ数粒、チーズ一個のみ。空しい気持と空腹感をふきとばすようにウイスキーを冷えた体に流し込むと、早々にシュラフに潜り込んでしまった。

シュラフ内でウツラウツラ始めた午後九時頃、暗闇の中に突然現われた三名のパーティ。待ち続けたNパーティが元気に到着した。紅一点のIちゃんの顔がライトで照らされた時は、感激で一瞬マリア様か観音様の再来に見えた。しばし歓談、夕食の後、安心して就寝。

翌十一月四日・快晴。今日は女峰山頂から赤蘆山を経て霧降高原に出る比較的のんびりコースであり、ゆっくり起床。早朝の太陽の下で見る唐沢小屋は無人大小屋としては立派なものだ。「立つ鳥跡を汚さず」が山男のエチケット、N氏が帯を持ち出してきて二階から一階のフロアまできれいに清める。全員で小屋内外の掃除。ゴミ焼却が終了し、すっきりしたところで、山頂を目指して出発した。出発時間は陽が高く昇り始めた七時二十分。樹林帯を過ぎて一汗かいたところで女峰山山頂の小さな杜前に到着。頂上は三百六十度さえぎるものもない展望で、男体山、大真名子、小真名子、奥白根山の日光連山から尾瀬、那須、初雪の富士山まで絶好の景色で大満足。

下りは赤蘆山を経て霧降高原へ。途中アクシデントはあったものの、快晴の天候に恵まれた、たいへん快適な山行になった。

(鈴木 菊雄)

